秋田県生涯学習センター　令和元年度家庭教育支援指導者等研修

家庭教育支援チーム・リーダー養成講座③　実施レポート

日時：令和元年１０月１３日（金）１０時～１５時
会場：秋田県生涯学習センター　３階　講堂　　参加者：５５名（うち市町村等から４２名）

今回は「家庭教育支援における男性の関わり方について語り合おう」というテーマで講座を開催しました。午前はパネルディスカッションを、午後は午前の話題に合わせて、ワールドカフェ方式によるグループ協議を行い、地域コミュニティの中での男性の役割や地域における男性の巻き込み方等について学びました。

【午前の部　パネルディスカッション「“おやぢから”を見直そう」】

加賀谷

佐藤氏

長谷川氏

滑川氏

今回は、県内で家庭教育支援に関わる活動をしている男性パネリスト３人のフリートークによるパネルディスカッションを行いました。（コーディネーターは当センターの**加賀谷 宗篤 社会教育アドバイザー**）

はじめに、「家庭教育支援で、父親や地域の男性だからこその強みや弱み」について話し合いました。横手市のパパ’ｓサークルピーターパン代表の**長谷川 聖史** 氏からは、男性は年齢を重ねても「遊び心」を持ち続けており、周りにワクワクドキドキ感をもたらすとの話があり、それを受けて、潟上市の追分フェスタ代表の**佐藤 存** 氏は、イベントでは道具やスキルを持っている男性は頼りになることや、野外体験を通じて親に地域理解等の学びが生まれることなどの紹介が続きました。また、フロアからは「男性は単発の企画には協力的だが、その後の活動には続いてくれないのでどうしたらよいか」との質問があり、湯沢おやじの会の**滑川 道彦** 氏からは、「〇〇があるから行がねばね」となるように、個に応じて依頼を見直すことなど、自身の経験を基にした話がありました。

次に「父親・地域の男性・企業などの“おやじ”は家庭教育支援チームのメンバーとして、どんな役割を担うことができるのか」についてパネリストから話をしてもらいました。佐藤氏は、困ったときに頼られるような地域のおじさんとなれるように、追分フェスタはサードプレイス的役割を果たしたいこと、長谷川氏は、子ども食堂を一例に、企業や地域とのつなぎ役としての役割の重要性について語ってくれました。また、現在家庭教育支援チーム員として活動している滑川氏からは、支援というより応援という意識で臨めば気持ちも軽くなると伝え、親が地域で活動する姿を見て子どもは育っているとの話がありました。ここまでの話を受けて、次は「家庭教育支援チームに関わる“おやじ”を増やす策」について対話を進め、その中で、普段関わりの無い人を取り込む、お母さんたちにまず関心をもってもらう、会員情報を載せたチラシを学校で配布してもらうなどの対策が挙がりました。

最後にコーディネーターが、家庭教育を母に頼ってきた歴史的背景や、思春期には家族内で完結する家庭教育ではすまないことが多い現状を踏まえて、父としての“おやじ”を根幹に据えつつも、“地域のおやじ”や“社会のおやじ”が家庭教育支援に荷担するという動きが見えてきているとまとめました。中学生も含めたフロアとの質疑応答もたくさんあり、充実のパネルディスカッションとなりました。

【午後の部　演習「地域人材の巻き込み方」】

演習は、パネルディスカッションで話題とした３つのテーマに沿って、３ラウンドのグループ協議（ワールドカフェ形式）を行いました。特に、“おやじ”を増やす策については、老若男女の多様な世代からユニークなアイディアがたくさん出され、人脈やつながり（若者会、町内会、親子会、部活等）から見出す、男性の特技を生かす、頼りにする、「おもしぇーがら行ぐがっ」となるような男性向きの企画をする、企業・会社にも働きかけるなど、多種多様な発想がみられました。参加者は、家庭教育をめぐる現状から“おやぢから”の必要性を認め、関わり方についてのアイディアを実践してみようと声を上げていました。

【参加者の声】（抜粋）

- おやじが参加するためには、リーダーとして活動するおやじが必要。「自分がこんなことをやって楽しい」という思いを直接伝えることが一番のリアリティをもった声（勧誘）になるのではないか。
- 「ゆるさ」が必要。チーム立ち上げにもゆるさがあっていいのでしょう。「湯沢おやじの会」には会則がないとおっしゃっていた。おやじの楽観性で「まずやってみる」でもいいのかと思った。
- 男性は女性よりもピンポイントで大きな力を提供できると思う。つかず、離れず、地域の困りごとに耳を傾けられる位置でいてほしい。